

傍観者である者よ、聞け

(マタイ福音書11章7～15節)

7 この人たちが行ってしまうと、イエスは、ヨハネについて群衆に話された。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。

8 でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。柔らかい着物を着た人なら王の宮殿にいます。

9 でなかったら、なぜ行ったのですか。預言者を見るためですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょ。預言者よりもすぐれた者をです。

10 この人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。

11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。

12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。

13 ヨハネに至るまで、すべての預言者たちと律法とが預言をしたのです。

14 あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです。

15 耳のある者は聞きなさい。

バプテスマのヨハネのもとから来た二人の弟子が帰られると、主イエスは群衆に向かって、バプテスマのヨハネについて教えられた。主がバプテスマのヨハネについて語っておられるのは、主の弟子になろうという決心をまだしていない、いわゆる群衆に対してである。この群衆は、実のところまだ何もよくわからずに、ただ主について来ている、いわば野次馬。主は彼らに対して、ヨハネの働きを紹介する必要を感じられた。

この群衆は、明確な目的を持って主について来ていたわけではない。ただ珍しいことを教え、行う人への好奇心が、彼らを駆り立てていたと思われる。バプテスマのヨハネが荒野で宣教を始め、悔い改めのバプテスマを授けていると、その服装の風変わりなものと、多くの人々がぞくぞくと彼のもとへ赴くその壮観な眺めを見るためにやって来た。

主は皮肉たっぷりに「風に揺られている葦を見に来たのか」と言っておられる。もの珍しい人々なら王宮にもいる。彼らはもの珍しい現象を見ようとしていたにすぎない。

しかし、預言者のもとへ来る者は預言者を見に来るべきではない。預言者に聞くべき

なのだ。そして、ここにいる預言者は、預言者よりはるかにまさる者。それは、力や説教の内容においてまさるというのではない。メシヤの到来に際して、その直前でメシヤへの道備えをするという意味ですぐれている。その旧約最後の預言者こそ、メシヤを親しく紹介する者。

そういう意味で、ヨハネは旧約最後の預言者として最も重大な働きをする預言者である。旧約時代は今やヨハネをもって終わろうとしている。主がこの地上に人の姿をとって来られたことによって、旧約時代は終わりを告げ、新約時代に入ろうとしている。

そして、終末の時代が来ようとしている。いや、主が人の姿をとって来られたことによって、今ここに、その時代が到来したのだ。神は人の姿をとって、この世に来られた。やがて十字架の上において成し遂げられる主の贖いののち、よみがえられた主の御顔に輝く神の栄光を見たキリスト者は、たといどんなに弱い者であっても、ヨハネよりはるかに勝った恵みを得ていると言うことができよう。

このように、バプテスマのヨハネは、神の救いの歴史において重大な位置を占めるが、その彼も正義のために投獄されてしまった。今やバプテスマのヨハネは獄中であって、最後の務めとも言うべきものを行なった。それは、彼があかしし続ける救い主イエス・キリストを、彼の弟子たちが受け入れないために、弟子たち自身を主のもとへ送って、主御自身に親しく接するようにさせたということであった。

主が群衆たちに対して、バプテスマのヨハネに注目させるようにしておられるのは、彼らが単なる好奇心からの追従者であり続けることを好まれなかったからである。好奇心からの追従者とは野次馬のことで、野次馬であるかぎり、彼らは救い主に対して傍観者であるにとどまる。主はいかなる人も、救い主に対して傍観者であることを許されない。救い主に対して傍観者であるということは、何の意味もないばかりか、むしろ自らの滅びを確定的にする以外の何ものでもないからである。救い主に対しては、人格的な関係に入ることが大切なのだ。

群衆といえども、彼らはユダヤ人であり、それゆえに旧約聖書にある事柄には精通していた。救い主の到来とか、その直前に道備えのエリヤが出現することなどは、よく知っていた。そこで、主は旧約の最後の預言者であるマラキ書に預言されている道備えのエリヤこそ、バプテスマのヨハネなのだと言明しておられる。そう言明することによっ

て、主はヨハネが紹介した救い主である自分に対して、単なる野次馬としてあり続けることをお許しにならなかった。

バプテスマのヨハネが宣教を開始した時から、人々によって天国は非常な熱意と努力とによって追求されて来ている。真理を知らされた者は、いつまでも野次馬であり続けることはできない。

主イエスは、「天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています」と語られた。詳訳では「バプテスマのヨハネの日から現在まで天の国は猛烈な攻撃を受けて来て、激しい人々がそれを〔高価な報賞物として〕力づくで攻め取っている〈天の国に参加することが非常な熱意と激しい努力で追求されている〉」と訳されている。野次馬的態度では、天の御国に入ることはできないと警告された。

主は、群衆に対して、マラキ書の預言をもって、救い主に対する目覚めを起こさせておられるが、今日の群衆に対しては、いったい何がそのような働きをするのか。それは、同じく聖書である。主の時代に聖書がそういう役割を果たしたように、今日においても聖書こそは、私たちに同様の役割を果たす。

ある人々は、キリスト教の何かに惹かれて教会の集会に来られる。しかしいつまでも教会にあって、傍観者として立っておられる。けれども、教会にあって傍観者として立ち続けることはできない。それは無意味であるばかりでなく、危険である。

私たちはだれもそうした不安定なところに立って、救い主を傍観してはならない。救い主が自分にとってどういう意味を持っているのか、救い主をもっと積極的に知ろうと努めなければならない。そして本気で主イエスに従う者とさせていただこう。

〔参考文献〕 マタイによる福音書（上）私訳と講解（羊群社）,1999；新聖書注解（新約1・マタイの福音書）（いのちのことば社）,1993.